# 浜浦だより

第632号
新潟市中央区浜浦町1の1
浜浦小学校
電話（025）266－3181
http://www.hamaura.city-niigata.ed.jp/

## 放っておくのは

校長　小林圭一

ふらりと体育館をのぞきに行くと、奥の方で子どもたちが何やら言い合っている。遠目によく分からないのだが、何かトラブルがあったようだ。

さて、どうしたものか。

◆

昨今、教育の場では、「自己肯定感」という言葉がよく使われる。様々な国際調査で日本の子どもの自己肯定感が低いことが明らかになったこともあり、自己肯定感の伸長が求められているのだ。

今年度の新潟市の調査によれば、「自分には良いところがある」という質問に対する浜浦小の子どもの肯定的回答の割合は、八四％。決して低くはない。

が、満足することはできない。肯定的に回答していない一六％を児童数に換算すると、五〇人を超える。

◆

どうすれば子どもの自己肯定感を高めることができるのだろう。

まず、言えるのは「ほめる」ことだ。

先の調査からは、浜浦小の子どもはほめられる経験がやや少ないという一面もうかがえる。私たちはもっとほめなければならない。

そして、もう一つ。教育の現場で継がれてきたのは、「まずは子どもに任せてみる」ということだ。

例えば、ある子が給食中に牛乳をこぼしてしまったとする。ここで教師がすぐに「台拭きを取ってきて」と声を掛け、その子が後始末をした後に「上手にできたね」とほめる。当然、その子の自己肯定感は高まる。

一方、牛乳がこぼれた後、教師は子どもと一緒に困ったような顔をしてただ黙っているとする。そのうち、その子が自分から台拭きを取って後始末ができたとすれば、「すごいねえ。自分で考えてできたんだね」とほめる。こちらの方が、自分で考えたという達成感を伴う分、子どもの自己肯定感はより高まると、ご理解いただけるかと思う。

もちろん、いつも黙って見ていることが正解ではない。大人が即、行動しなければいけない時もある。それでも、可能な限りは、すぐ側で見守りつつも、まずは彼らに任せてみる。こう構えることの価値を知っているかどうか。それが大きな違いにつながるのだと思っている。

◆

さて、体育館。言い争いは止んでいる。トラブルは解決に向かったようだ。

危ない、危ない。また、彼らから考える場を奪ってしまうところだった。この歳になっても、知らぬ顔して彼らを放っておくのは簡単でない。自省しながら、自力でトラブルを解決したことをほめに彼らのもとへ向かう。